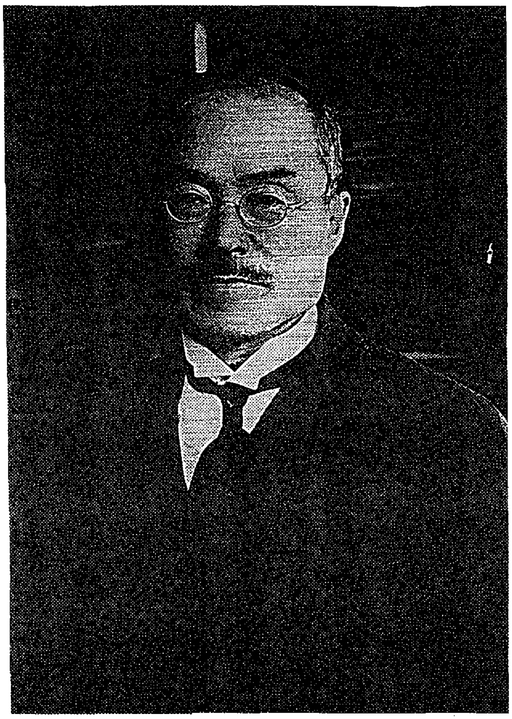
植物学者三好 學と「竹雨樓詩集」

安藤 裕
†田子 檀



東京帝国大学教授時代の三好　學

まえがき

本文に入るに先立って、この「竹雨樓詩集」を書いた三好學について、簡単な説明をする必要があろう。

三好を百科辞典や人名辞典で引いてみると「東京帝国大学名誉教授で、日本に近代植物学を導入、発展させたこと、天然記念物保存の必要性を提唱し、遂にわが国に天然記念物保存法の制定を実現し、わが国の植物関係の天然記念物の調査・指定に大きな貢献をしたこと、さらに桜と花しょうぶ研究の権威であったこと」等の記述がある。この三好については後に改めて述べることにする。

明治・大正・昭和初年（一四年没）に亘り最も著名な植物学者だった三好が、青少年時代に本格的な漢詩を詠み、詩集を残していることは、科学者三好學の研究上、大いに興味深いことである。

この「竹雨樓詩集」は三好自筆の原本一冊のみが現存しており（酒井敏雄氏所蔵）、内容保存のため印刷に付する必要がある。それはこの詩集によって、三好の青少年時代の文學志向と福井県三国湊と石川県立第三師範学校時代の様子、土岐小学校時代と児童生徒の模様、東京大学予備門の受験とそれ以降、友人知己、恩師との係わり、当時の彼の旅行等、その時々の三好の生活、心境を知ることが出来るからである。昭和一一年（一九三六）の三好のドイツ語の自伝にも、この頃のことは殆んど触れられておらず、この詩集は若かりしの日の三好の心の遍歴を推測する手懸りとなるものである。

筆者の一人、安藤の母綾江が三好の二女だった関係で、祖父學については多くの想い出がある。本稿は依頼を受けている「三好學伝」出版の準備の一環としてまとめてみた。

共同執筆者の田子が本詩集に収載された二五二編の詩を読み下し

ており、本稿の内容の検討を進めていたところ、本年六月に同氏が急逝され、安藤一人で本稿を仕上げることになってしまった。田子檀先生のお考えに添わぬものになったのではないかと思うが、お許しを願い、併せて心から先生のご冥福をお祈り申し上げる。

一 「竹雨樓詩集」について

この詩集は、枠罫が印刷された半截の美濃紙五二丁を半折し、表紙を付けて綴ってある。

詩集の冒頭に一行の前記があり、「已以下余十歳先後之作也」として五編の詩が掲げられている。これに続いて明治七年から二一年（一八七四～一八八八）にかけてのものは蘇江」の号で詠まれ、全二五二編に及び、いずれも毛筆で丹念に書かれている。

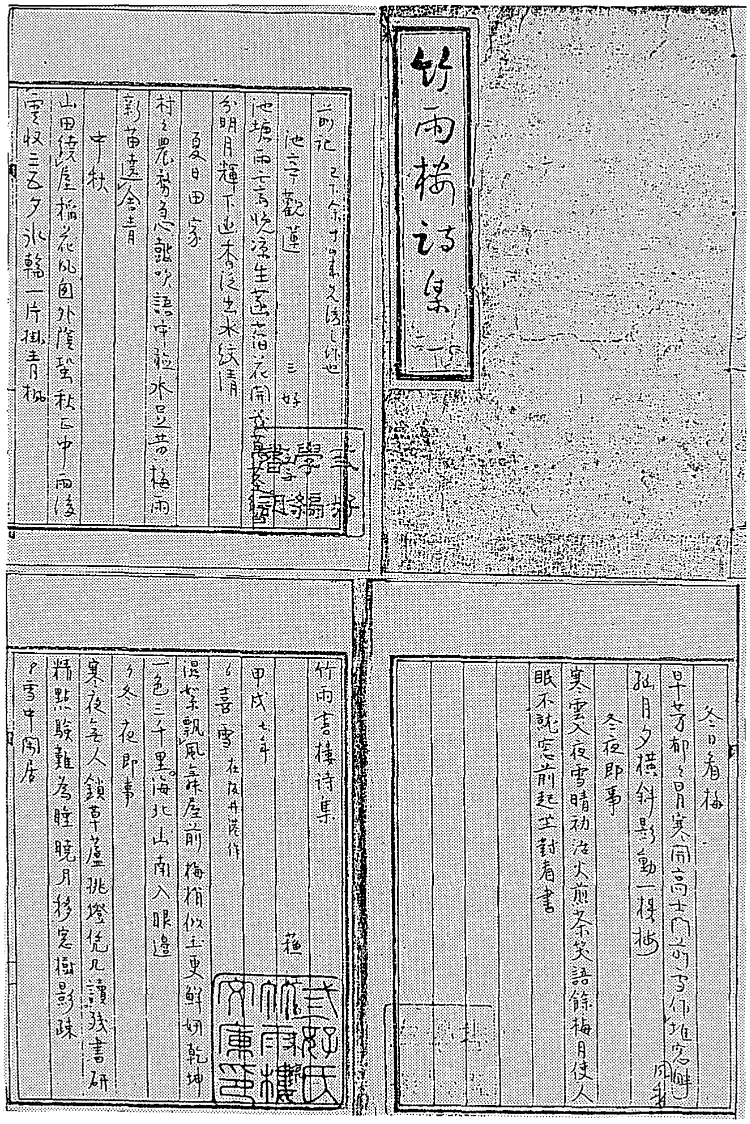
表紙に詩集「一」となっているので、続編があった可能性がある。

三好は同じ頃（明治八年～一二年、福井県三国町、石川県立第三師範学校時代）、「蘇江全集含英集」一三編を作っており、その中にも自作の詩一〇〇余編が収められている。これらの詩と「竹雨樓詩集」との関連については、改めて述べる予定である。

「竹雨樓詩集」の二五二編の詩の作詩の年代をみてみると

明治七年以前	五編	明治一五年	四編
七年	四	一六年	一
八、九年	〇	一七年	三
一〇年	四	一八年	三
一一年	三六	一九年	六
一二年	一二七	二〇年	三
一三年	三三	二一年	二
一四年	一九		

となっており、明治一二年には一二七編もの詩を作っている。この年は三好が師範学校を卒業して、岐阜県の土岐小学校に赴任した年である。「竹雨樓詩集」の詩の中に、何時、どこで詠まれたかが、明瞭に分かるものが可成あるが、彼の心境に触れたものは、その時々に三好の置かれた環境を知ることが必要になる。そこで次に三



竹雨樓詩集表紙と前記，第１頁

好自身について述べよう。

二　三好　學について

三好學に関しては前述の「自伝」の他に、東京帝国大学理学部植物学科の晩年の門弟である渡邊清彦博士の「三好學伝」（昭和一六年、一九四一）、上野益三博士の「三好學の植物学への道」（昭和四七年、一九七二）、安藤の「三好學」（昭和六三年、一九八八）、安藤と酒井敏雄の「日本の近代植物学を興した三好學小伝」（平成四年、一九九二）、同じく安藤の「植物学者三好學研究資料Ｉ」（一九九三）、「授業日誌と三好學」（一九九三）などと、門弟や知己による想い出や追憶文があるが、本格的な伝記は出版されていない。

ここでは、三好學の生涯のアウトラインのみを述べるので、詳しくは前記の印刷物を参照されたい。

三好學は文久元年末（一八六二）に、美濃岩村藩士三好友衛の二男として、岩村藩江戸藩邸で誕生している。明治維新（一八六八）を迎え、父母とともに藩主所領の岩村へ引き揚げ、城下町岩村での生活が始まるが、明治五年に父が急逝、翌六年福井県三国湊の伯父の所へ預けられた後、石川県立第三師範学校に進み、明治一二年卒業、岐阜県土岐小学校に奉職する。明治一五年、同校の訓導兼校長の職を辞し上京、東京大学予備門に入学している。三好は土岐在住の間に、岐阜犬山の漢学者村瀬太乙に師事し、漢籍を習っているが、「竹雨樓詩集」の中の作詩が、この時期に集中しているのを見ると、太乙の大きな影響が考えられる。明治一八年東京大学理学部生物学科へ入学、同二二年帝国大学理科大学植物学科を卒業し、大学院に進学。同二四年（一八九一）、大学よりドイツ留学を命ぜられ、ライプチヒ大学のペッファー教授 W. Pfeffer のもとで植物生理学を専攻することになる。明治二八年に帰国し、理科大学教授となり、植物学第2講座（植物生理学）を担当する。同年理学博士。明治三九年初めて名木などの天然物の保存について世論に訴える。大正三年野口英世博士の理学博士請求論文の審査をする。同八年「史蹟名勝天然紀念物保存法」が制定され、史蹟名勝天然紀念物調査委員になる。同九年帝国学士院会員となり、同一一年東京帝国大学理学部附属植物園長、来日したアインシュタイン博士の接待委員を勤める。一二年東京植物学会会長（昭和一一まで）、大正一三年停年退官、名誉教授となる。昭和一四年五月一一日逝去、正三位勲二等旭日重光章を追授される。

三好の日本の植物学についての貢献は、割愛するが、「生態学」という訳語を作ったのは彼であり、「最新植物学上、中、下」（昭和六年）や「最新実験植物学」（昭和七年）、「天然記念物解説」（大正一五年）、「桜花図譜上、下」（大正一〇年）などの名著の他、多数の著書、論文、論説などを残している。

三　「竹雨樓詩集」の詩について

次に田子が読み下した詩のすべてを掲げるが、多ページに亘るので、詩の内容による分類と、必要と思われる解説は次回に譲ることにする。

前記已下余十歳先後之作也　　　　三好　斈

1池亭観ル㆑蓮ヲ

池塘雨霽レテ晩淳生ズ。涵萏（かんたん）花開ク幾万茎。紅白分明ナリ月輝ノ下。幽香泛（うかビ）出デテ水紋清シ。

2夏日田家

村々農務急。鼓吹語中聴。水足黄梅雨。新苗遶田青。

3中秋

山田繞屋稲花風。窓外陰蛩秋正中。雨後雲収三五夕。氷輪一片掛青楓。

4冬日看梅

早芳郁々冒寒開。高士門前雪作堆。窓畔風香孤月夕。横斜影動一株梅。

5冬夜即事

寒雲入夜雪晴初。活火煎茶笑語餘。梅月使人眠不就。窓前起坐対看書。

竹雨書楼詩集

蘇江漁史稿

甲戌七年

6喜雪在阪井港作

湿絮飄風舞屋前。梅梢似玉更鮮妍。乾坤一色三千里。海北山南入眼辺。

7冬夜即事

寒夜無人鎖草廬。挑燈凭几読残書。研精点験難為睡。暁月移窓樹影疎。

8雪中閑居

六出紛々乱晩風。群峯鏤玉映玲瓏。豈妨羽客過山逕。温酒吟詩興不空。

（羽客：仙人道士羽衣を着た人）

9冬晴散歩

臘日乗晴歩野辺。過山傍水望悠然。行看愛宕還桜谷。去路鳥帰斜照天。

乙亥八年

丙子九年

丁丑十年

10書床有感

霜風凛冽鑽窓間。深夜読書身未閑。留寓五年恍似夢。何時業就返家山。

11冬夜即事

孤燈一穂影朦朧。凛々寒風入夜濃。夢覚衾衣冷似鉄。唯聞遠寺五更鐘。

12送友人帰家

君家辞去五更天。颯々暁嵐吹袖裏。欲別橋頭話難尽。一痕残月在孤巓。

13風月楼夜涼

風月楼頭風月天。朱絃高払一時賢。休言我輩少歓楽。橋畔洗炎意爽然。

戊寅十一年

14送龍動留学之友人

十一年来離別意。綿々欲語向何人。海天万里異郷月。此夜思君涕涙頻。

15題江天欲雪図

凛々盛冬碧草稀。寒鴉数点夕陽微。孤舟繋岸無人釣。千里陰雲雪欲飛。

16雪後即事

不愁凛冽送奇寒。雪後風光亦可看。独坐炉辺閑煮茗。一窓梅月影方団。

17 緑陰煎茶

緑樹陰濃涼始生。汲渓煎茗趣尤清。一杯喫去清風起。已覚瀏颷（いいかぜが吹いて）両腋軽。

18 又

緑陰煎茗倦心蘇。一味通禅妄念虚。数碗喫了肌骨潔。蓬莱仙岳在何辺。

19 又

緑陰閑煮茗。香気溢胸間。一碗清風起。疑身在雪山。

20 画美人

素縑一掃写仙鬟。自笑華顔対壁間。彷彿如生真乎画。嬋娟美女楚魂還。

21 病中作

昨夜二童来作障。孤身旅寓独断腸。人生似露亦何惜。関意双親在故郷。

22 読前赤壁賦并引

維時六月初七、午後浩堂、松洲、竹塘諸君見過。乃於坐翠庵之東廂煎茶閑談。時漸及斜陽。午熱既消清風徐来、少焉鸞月一痕、出於東山之上。玉兎輝々走羽水之面。景光蕭然。殆如秋夜。因取坡公前赤壁賦今誦数回、神気甚覚快。今宵月雖未満、現際此風光、思慕昔時坡公之遠遊、自不能措。因各以賦中之字、作七言四句云。

赤壁之遊亦楽哉。扁舟浩々御空来。江風山月取無尽。自適長終蘇子懐。

23 下足羽川

篷船下去羽江隈。玉露金風秋已催。悩殺今年今夜月。偏労客志亦悲哉。

注　・おすわ川　福井を流れる

24 梅雨有感

一脈離愁心不平。坐来無限断腸情。満城梅雨芸窓下。聞得杜鵑第一声。

注　芸窓　読書の室、書斎

25 赴坂井港

晩風吹雨草萋々。楊柳堤辺草鳥啼。一抹断霞消未得。夕陽来逼遠山西。

26 又

芳草萋々路幾般。軽車過到竹村間。回頭暮彩福城外。一角高峯日野山。

27 贈人

晩破翠烟過竹村。楓橋橋下水潺湲。問君勝否洞庭景。万里秋風月一痕。

28 十月十一日汽船発坂井港。船中吟

汽船過渡北洋辺。潮水激風勢猛然。遥見前山青滴処。奇松怪石向空懸。

29 又

号響一声貫似雪。倏焉船発港頭来。忽驚身在黄龍背。亦訝躰倶鵬鳥回。万里北洋無些点。空中唯見白帆胎。玻窓転眼望南角。

鷹国連山似□□。
30仝十二日発孰賀
暁風颯々渡津港。木芽山頭秋気清。暁靄
漸収天色豁。彦根城北曙暉明。
31十三日暁汽船発塩津。湖上眺望
暁霧朦朧湖面昏。模糊靄色惑乾坤。一梳
寒月蘋花曙。数杵鐘声響水村。
32冬夜月
陰雲晴散雨餘天。月上書窓正皎然。風動枯
松吹未断。寥々一犬吠橋辺。
33詠松二首
錯落枝如敵万軍。千尋幹直欲凌雲。粋
然長傲三冬緑。独称操堅有此君。
長傲霜雪未曽凋。常看仙鶴宿高標。千
尋奇幹凌雲聳。疑是虬龍躍九霄。
竜の一種
34秋日山行
偶伴山童行々採薬。深登重嶺雲粘屩。帰
来何処晩鐘響。滅却秋光収鳥雀。
35秋日山行
十二峰頭高巋々。斜往石径折三四。千林葉
落起霜風。吹散鐘声帰古寺。
36秋晩
幽径無人独杜門。閑耽吟雅到黄昏。千林
落葉埋山寺。一抹紅霞沈遠村。僧衝晩鐘禽
散樹。月生東嶺漸移痕。西樓時聴残砧響。
秋夕風光渾断魂。

37和森伯卿詩
曽耽風月脱塵事。螢雪閑窓書幾篇。君
見静山如大古。盍逃幻夢楽天年。
38送延年堂主人
樓上琴酒常舞歌。前庭松菊歳繁多。請
君須識延年術。非用仙舟在相和。
39客舎萩花開
秋声颯々勢如雷。一朶萩枝帯露開。堪悒
幽人覊旅情。偏存撩乱花中来。
注　・萩よもぎ、ひさぎ、日本では「はぎ」として使う。ここはその意
40秋夜傚環環体
異郷水□□□。紅葉満林秋已闌。昨夜稲君
来入夢。北風吹鴈叫雲端。
北風吹鴈叫雲端。暁月移窓霜威寒。正是
金天粛殺節。両間光景尽悲酸。
両間光景尽悲酸。宛作盛冬雪裡肴。嘯岳
猿声添旅恨。異郷山水□□□。
41九月到福井城二首
福城是我好区寰。況亦旧知存交間。最愛
桃洲橋下晩。一輪玉鏡上東山。
孟秋重到福城裡。足羽江頭水濺。因会
交朋談旧話。一痕新月上疎簾。
42十月趍坂井港途上逢雨
白日没西坰路遙。暗風吹雨入車横。岸辺蘆
萩水村裡。認得寒灯滅亦明。
43寿飯野大孺人

玉堂開宴瑞雲懸。寿到瑤池不老仙。膝下子孫歌舞裡。南山共祝万斯年。

44 戯題肖像

小身雖小心非小。五尺躰軀渾是神。知否頭脳裡。浩然之気対天真。

45 酒間放言

自比李張詩酒仙。酔中詩就走雲煙。漢王賜我郭弘郡。一斗百篇洒満泉。

46 題雪江晩釣図

雲囲万岳天花淅。二十四橋残照滅。白鷺両三掠隊飛。長竿独釣寒江雪。

47 除夕書懐

年云暮矣雪霏々。閑煖新醪餞歳時。紅塵十丈奈難払。今是昨非日似馳。

48 越濃之境別友

君向越州我入濃。一般山水幾般秋。悲歌休唱陽関曲。涙々方為万斛愁。

49 戊寅秋日、全発南越還濃。路過賤岳麓、遂登山□古戦場、作長句。

琵琶湖北胆山西。地骨秀抜作一嵆。千秋名高志津岳。青史長伝闘狻猊。歳次戊寅秋九月。金天粛殺気凄々。我会還越過此地。暁緊青鞋踏幽溪。崔嵬石径岳又巖。突兀斜路幾攀躋。霜風吹松音淅々。澗水触石響凄々。」想見昔時二百歳。六十六州幾鯨鯢。猿郎伐濃柴守越。刮爪磨牙負嵎棲。清秀亦守在此砦。塢壁未完塁猶低。□応出機孫子略。掛勢制羅北狸睇。疾風倏捲迅雷迸。羅刹呵来万馬蹄。猰㺄嘶山山蹂躪。霹靂墜頭頭粉虀。」元蕃固是猪豕勇。傲然却為舅氏詆。唯知突進奪敵塁。不知奇利収鋭犁。一鞭已獲雖獲将馘。豈料自己却為醯。」飛報到処軍既出。越兵悉在猿郎羈。狁犯生翼迅自飀。万炬焦天明於瓾。黎明千軍衝山趾。乾坤震動万鼙鼙。銃煙四迸飛霹靂。刄鉅互交鉄馬嘶。夜叉玄蕃振鉄棍。縦横奮撃似猛猊。自当板橋張都督。欲圧孟徳万軍蹏。神眼一睨馬辟易。七条槍士争先擠。槍々光閃百千電。恰如猛虎駆羸羝。北兵敗頽如倒潮。遂使豊公籌不睽。」七条槍中誰最著。加藤肥州是驢騠。」君不見果断見機事。即就所以智猿計。老犀幾多。猛虎争先突。皆在皷舞衆心締。」又不見古来鯨鯢互呑噛。荼毒蒼生使為鬩。蒼々丞民亦何咎。応遇太平酔如泥。」吾読青史知本末。今来此地看山谿。回想二百年前事。因揮管城此記題。悲風凄々水淅々。猶覚風雲更惨悽。

己卯十二年

50 元旦和道北詩二首

除夜鐘声半入新。枕頭残燭向鶏辰。詩人猶結去年夢。夢繞羅浮山畔春。

万戸千門競祝新。呻吟独悒是何人。黄鶯不識幽齋恨。頻囀梅花欲領春。

51試筆

暁汲清瀾試墨新。雲煙走処自精神。擲毫頻向朝暾酌。酔裡乾坤別占春。

52答人

龍待雲兮虎待風。風雲会得試長鋏。乞見子房博浪鎚。奔雷何必限荊聶。

53情思

淡拂翠蛾立玉欄。愁魂脈々情羅縷。比郎巫岳楚朝雲。妾是陽台春暮雨。百歳長期比翼衾。千秋偕老鴛鴦枕。妾恥薄情遊治児。契郎孝尾回文錦。

54題月夜某将攻敵軍図

霜月稜々風淅々。丈夫横戟鳴金鉄。抜山勢向敵軍衝。鉾電剣華乱似雪。

55桃源遺興

春光十里水之涯。李白桃紅花又花。欸乃一声人不見。扁舟棹廻入煙霞。

56三月中浣、予在土岐郷。一日快晴、与蕉隠・静所数子、臨前川釣。焉静所誤被小魚刺其指。乃戯賦

春光山水幾郁々。負媛前川臨緑湲。生憎魚奴刺君指。帰路担竿月一痕。

57柿野旅館

霜満四山気粛清。沈々残月当窓明。寒鴉啼散暁鐘響。惹得楓橋夜泊情。

58岐岨山道

山似青螺西又東。水如素絹繞巖通。草鞋踏破雲畑際。身在襄陽画幅中。

59又

寒風吹雨路茫々。路上行人欲断腸。回首千山東走裡。嶽雲絶処是家郷。

60岐阜客舎聴雨

繞家梅柳幾村々。処々春風已幾番。夜半金華山畔雨。旅窓欹枕独消魂。

61岐阜旅館暁望

風捲痴雲雨忽晴。霞囲楼閣景猶迷。晨来試向山頭立。暁月光微金嶺西。

62藍川晩景

江村日晩暮烟靄。何処楼台調瑟声。好是金華山上月。清光偏照旅人情。

63与石坂氏登金華山二首

藍水靄烟金嶺霞。果知仙境有仙家。翠光酌尽三觥酒。遮莫春風催落花。

万里江山万山情。北南入眼又西東。三觥浸入満天翠。翠墜觥心一吸空。

64将発岐阜逢雨不果。賦送石坂氏

昨日嶺頭霞。今宵湖上雨。浮雲妬我行。旅恨思羅縷。

65題青花堂主人書室

梅綻一枝香。蘭開馥郁風。君取此清福。納収

胸腹中。

66犬山途上煙雨

春雨一犁濛似煙。遠松青与靄雲連。回頭
山郭水村景。千里縮来入眼辺。

67発小牧宿雨快霽

颯々晴嵐雲捲尽。遠山青満柴車来。村翁
吟下隴頭路。一曲樵歌梅悉開。

68偶成

多歳未逢三顧人。空耽風月楽吟身。満腔韜
略有誰識。龍臥蘇江垂柳陰。

69和道北岐阜客舎詩

瓶裡清香梅一枝。薫風徹骨未眠時。琴絃半
調誰家婦。応是春閨訴遠思。

70和蕉隠詩

飲酒後須為酔眠。玉山欲倒詎論銭。天外先
生酔如死。不関狂客尚流涎。
醒則読書酔則眠。家醸放酌不関銭。竹窓三
友兼風月。清福満腔詎垂涎。

71江上煙雨

江上一犁雨。数峰烟靄青。無奈黄梅樹。落
花満後庭。

72畳韻

村々雨又雨。江上烟波青。庾嶺梅幾点。香風吹
満庭。

73梅屋子贈予梅花

童子取梅花。贈来詩酒家。清香眠不得。幽月
照花々。

74題羅浮神女図

趙氏是仙人。梅間幾弄春。羅山幽月夕。香霧
鎖花真。

75漁翁得嘯韻

漁翁夜傍西巌釣。時酌一瓢吟又嘯。巌子（老子のこと）
廟前風月清。滄浪浸影幾松（松のあるやまみち）。

76次吉田蕉陰詩韻

春満江村草似煙。蝶遊蜂戯路相偏。万頃
香雲吹不尽。一片禅揚一場眠。

77欲訪太乙翁于犬山逢雨不果

蘇水涯頭白帝城。幾回夢到乙堂驚。三春
乱散梅花雨。空使孤人遂不行。

78春山書懐

無奈白駒超隙走。春風秋月等間過。千山花
満阿郎恨。偏向撩乱綻裡多。

79三月念一日、訪田兄。机上有司空曙之二十四
詩品、淡雅可誦。乃取典雅篇冠眠琴緑陰
之四字、以作七絶一首

眠淡玉壷可買春。琴佳幽賞菊佳人。緑
竹雨晴鳥相逐。陰中花落白如雲。

80春雨湿花冠題

春宵花綻雨村々。雨湿花々点々開。湿香
暗動鶯先識。花湿鳥啼便思君。

81酔裡与田士顕探題得欝字

酔中須散欝。黙々何如仏。季白百篇徒。亦

非池上物。

82又
亦愛謫仙風。篇々酔死中。蘇江漁史宅。
采石垂楊東。

83詠鷹得和字
久慣昇平安懶和。運回粛殺鷹降窠。忽有
秋風乱胡角。可憐鋭爪攫小蛇。

84和田兄詩
筑山之北水東西。柳絮欲飛花正迷。看他
黄鳥蹴花辯。呼覚家々春夢啼。

85戯贈吉田士顕。
千名還百名。天地皆吾名。情至亦無擇。一詩
即一名。

86偶作
遮莫世人交不深。身名濁瀆是黄金。不
関蘇水一漁客。家在煙波垂柳陰。

87送宮地静所帰郷二首
和唱陽関離別曲。送君蘇水孤山東。水山相映
月還出。光滴翠微第一峰。
丈夫何可伏偏東。奮発須生豪邁風。君見
蛟龍得雲雨。不棲浅水小池中。

88題墨竹図
一夜竹洲龍影動。半根勁節凌霜清。　蘇江
林梅陶菊楚蘭矣。共競佳人君子名。　蕉隠

89己卯四月与田蕉陰賞瀑布干龍吹洞作回文詩、書石
六月雪飛岐岳寒。水声鳴石下溪間。素練
旋転三千丈。須作香爐一様看。
須作香爐一様看。懸簾万丈絶崖間。天公
手段堪驚嘆。六月雪飛岐岳寒。

90五月田蕉隠与学生数輩拉予上鶴城山。
松嶠行々聞松籟生。題詩岩石払苔明。四六
峰頭看々欲尽。満天翠色墜觥清。

91読秋声賦
欧陽先醒盧陵園。聞得秋声一断魂。天籟
機通童子夢。満園蟋蟀月痕々。

92与田士徳探古句得仙家犬吠白雲間之句、乃為承句
賦七絶
古梵鐘伝薄暮山。仙家犬吠白雲間。欲
題黄葉去玄閣。奈此雲山終日閑。

93釣岐川
不関落英散紛々。花是春時已十分。孤舟今日
岐川釣。脱却風塵帰水雲。

94五月西遊過木曽街道
木曽原上草萋々。孤客天涯暮鳥啼。徐
呼邨翁欲尋路。夕陽逼在数峰西。

95偶成
水雲身是実悠々。到処江山尽自由。買酔紅
楼非我願。弄華吟月過幾秋。

96閑適
已脱塵問自悟真。竹楼雨裡納茲身。帝王争
識閑中楽。楽属看花酔月人。

97五月上浣、予発土岐郷西遊。校生小倉米ニ送至。

賦四十四句謝労。
一夜柴嵐促我行。急緊旅装発江城。江城送予小倉子。先導山路度棘荊。正是己卯夏五月。祝融司任布威令。新緑蒼々草裊々。万山青入両眼清。錦蠻語滑鳥四囀。森林夏至蝉已鳴。疲馬不愁紅日晩。石径無塵喜歩軽。吟哦声中路幾過。行々看尖閣突空明。小倉子曰彼是御嵩駅。木曽街道従是分。到看青松模糊遠。幾行旅人幾散群。同是天涯千里客。家在茫々湘水雲。乃呼村醪傾別盞。酒甘如蜜不下顋。漸払袂角欲相別。子不忍別猶送来。郊外草青緑如滴。柴嵐疑是来蓬萊。余云阿子先帰去。為有一語寄子懐。子性純良余所恃。崑山蔵玉未全皚。要樞唯在勉正学。正学是起身之材。起身唯在勉与忍。寄語岐中季秀才。奪発能勤正学否。嗚呼光陰一去亦不回。学生須惜寸分刻。子看夏候已到草。生々万物得時各栄。育子須夙使成正学。後来熟々感化育妙。」忽見夕陽逼遠峰。一言喝了乃欲別。風度森林松有声。

98 戯題蕉隠静所及予三大笑図

虎溪三大笑。脱俗悟天真。陸陶兼遠師今尚有此詩。

99 漫言

蛟龍不得雲。蟄臥水之濱。風雲南陽路。亦酬三顧人。

100 十一月初六、田君被訪、喜賦

満城秋色錦楓明。泉石烟霞仙荘情。東籬黄菊時催酒。空際鴈行飛作声。夢遠関山壮士情。魂迢湘水佳人恨。倏有子猷夫子駕。愁眉散入玉琬觥。

101 同和田君

竹樓主人。饗蕭詞客。与菊与酒。淵明魂魄。

102 十一月十一日秋雨蕭然、客寮無聊、賦之遣悶

寒蘆戦処雨蕭々。日暮溪山鐘音迢。客寮徐酌三杯酒。聞断秋潮到柳橋。

103 仝十六日与諸子到山看網鳥

払暁衝霜攀遠岑。辰星落々翠嵐深。叮々何処難看得。一縷疎煙網鳥人。

104 仝廿二日訪田君賦松陰寒月得松字

峰頭万籟已収響。千壑飛泉乱晩鐘。起訪僧房談玄理。一輪寒月照疎松。

105 杜鵑

人道杜鵑叶。江村猶未聴。静向空山坐。千林月転清。

106 夏日絶句二首

世間塵事断無聴。籐枕凭来情倦時。一巻南華看未了。夢魂已化蝶魔飛。

大玄経是枕辺書。隠士臥高水竹居。夢魂忽被松風破。烹茶烟颺夕照餘。

107 納涼

追涼晩歩翠楊東。江上漁篝点々紅。欲棹

扁舟賞風月。一輪影在緑波中。
108 題芭蕉
雷雨洗麝墨。芭蕉颯有声。月出山房夕。
滴零相映清。
109 苦熱
岐州六月暑如酔。高閣曲肱夢転軽。山童
不識先生睡。聒々頻敲茶臼声。
110 寄骨董某
糊塗雲烟何足比。一看信偽更分明。狡商設
可欺凡眼。不使能欺此醒生。
111 題節山蘭図
幽谷佳人妍且清。微風時作颸瀏声。将君
磊落襟胸筆。忽使芳香紙上生。
112 題節山画山水図
水竹居辺水竹清。林間声似報秋声。南
山雷雨涼如水。看在東岑明月生。
113 傚甌北
竹雨楼辺雨似煙。急雷頻愕主人眠。慰寥
買酔不慮酒。巾箱逸篇買酔銭。
114 訪田蕉隠
一縷簇煙是晩炊。先生今日釣帰遅。家有
清風明月友。千金価格勝為詩。
115 閑適
晦跡江山喜無累。半簷草屋有唐詩。東
籬黄菊嫣然笑。正是白衣送酒時。
116 華清宮詞
仙霞暮抹華清宮。水殿雲楼秋意濃。風
払羅緯吹過処。真珠簾外月玲瓏。
117 秋日絶句二首
遠巒夕照逼来時。山紫水明看転奇。風光墜
入銀觥裡。遮莫亦無写景詩。
蘇水烟生人未帰。黄昏楼上望尤宜。遠巒
一帯迷明滅。正是斜陽春逼時。
118 秋夕
高楼人散夜筵空。遮莫幽情悟孤禅。一陣
微風吹雨過。残蛍滴在碧梧辺。
119 雷雨破午睡
誰敲青州従事門。恍然得慰此幽魂。殷其
一発夢雨驚覚。雷雨応行湖上村。
120 晏起吟
悠然恰是希夷仙。閑適人居天外天。日影三竿
驚覚処。人言先醒甚貪眠。
121 某筵上吟
青州従事夜筵開。六々鱗登龍壑来。此坐
竹楼主人在。煙雲催雨且啣杯。
122 無々吟
由来天道皆虚無。有是生無々乃無。此理古
来誰看破。茫々大極固無々。
123 南越故人寄信誦了賦
遙自越山寄音信。誦来悲喜不堪情。蜀
魂一叫雲千里。夢逐雨声到福城。

124 一日誘校生掘貝石于松洞。蓋五千年
前之物也矣。帰来疲甚。揮毫破睡
驚破睡魔走墨龍。筆鋒綜錯学南宮。
松凋弔古是今日。仙味溢為筆下風。

125 訪田君。偶々蓮花開
晩策尋詩引歩遅。黄昏楼上点燈時。油然
頻訝香風襲。知有蓮花満池開。

126 秋夜訪田士徳
已覚漙々横水城、夜深白露寂無声。南洲
有句君知否。幽澗松風和瑟清。

127 七月既望
曽自蘇仙遊赤壁。千秋風月属何人。此夜
泛舟尋旧古。始知造物本天真。

128 七月二日予帰故園即事
浴罷東園散竹笻。南山雷雨去無蹤。豆
棚花下新涼好。不要避炎登碧峰。

129 題秋扇
独憐塵界本無常。生死栄枯夢一場。試問
華清宮裡女。秋風幾度到空房。

130 題墨池帖
帰来脱却事紛々。詩正就時酒正醺。一簾新雨竹
楼下。閑蹴墨池走筆軍。

131 偶成
門外碧流楼外竹。蘇仙天外一閑人。飲酒先生作詩
我。梅花雪月楽清貧。
獨耽翰墨楽清貧。風月場中自有神。看破東
湖古先醒。錦衣玉食本浮雲。
脚力已蹉千里道。眼光未徹万巻書。半生贏
得附児戯。時望雲龍登大虚。

132 煙雨晩未霽
雨満江邨濛不辨。煙雲深処一僧帰。近山転作
遠山看。晩磬声況山水奇。

133 絶句
晩来白雨洗炎去。風送遠雷夢転驚。好是東隣
吹玉笛。奈何残砧労幽情。

134 八月十四日暁雷破夢
昨宵会友飲樽前。一枕慒騰帯酔眠。忽被暁雷
驚残夢。垂柳門外雨如煙。

135 八月廿四日　訪田士徳以下六首席上吟
夜来雨過万山新。藿杖尋詩景絶塵。露洗荷香
瑞巌暁。竹林読易是何人。

136 住吉遠景　得灰韻
遠出浦頭天水開。秋河疑是墜燈台。蒼松長在青
洲上。影与暮潮転去来。

137 鳴戸渡船得庚韻
潮流百丈入雲鳴。東海尾閭実可驚。風起渡頭船欲
覆。一帆辛向大虚行。

138 松島夕照得先韻
欲把幽勝入新篇。松島棹来賞景船。無数青螺
迷夕照。金華山上月籠煙。

139 瑞巌山　是即土岐郷信光寺也。樹林幽邃、田君之廬在其下也。
奈此閑々高踏何。煙霞泉石養天和。黄葉時飛

山寺晩。瑞巌山畔白雲多。

140 将辞去時、雷雨一過

果是人間有此会。琴詩酒伴悉布衣。興和雷雨決然至。晩照電光下翠微。

141 八月廿九日夜与節山帰岩村。道至七廻山月色奇絶

欲乗夜涼去。踏破白雲岑。松籟不吹断。千峰月一輪。

142 帰園即事

欲賞煙霞医宿痾。帰来樽裡酒偏多。蟋蟀鳴堂故園晩。月明清裡奈秋何。

143 偶成

学海深遠天水濶。順帆求路莫壅閼。朝瞰看々転夕陽往。一葉孤舟何日達。

144 九月訪石道北和其芝海暁望之詩

暁煙一抹月将落。芝海残燈光漸微。蓬底訝聞柔櫓動。正知遊子戯花帰。

145 仝四月与節山発岩邑。山中逢雨首

朝来行尽幾嶙峋。漠々煙雲欲着身。応在元章画図裡。笠簑衝雨是斯人。

丹心愛国奈才慳。畢竟労生夢幻間。維十二年秋九月。一簑煙雨下螺山。

146 秋日絶句

寂々茅廬独閉門。三秋景物易銷魂。風吹衰柳晩来急。一鴈啼過夕照村。

147 九月七日訪田士徳、題其百翠園

古松延臂如龍舞。修竹凌空堪払塵。桐冷雨師雲外路。蓮香天女廟前津。栗園霜墜子黄落。楓葉染紅秋正深。別有一輪優等物。毎宵来照故人心。

148 秋晩得城字

晩来秋入荻花驚。万里江山無限情。七十二峰灝色浄。西風鴈落潯陽城。

149 秋琴得槐字

是不文君秋日寮。独居水殿弾中宵。曲了玉欄所何観。蘆江潮満木蘭橈。

150 題大黒振宝槌図

祈大黒。福神振宝槌。願与金銀山又山。大黒告。福徳与爾働。此槌応是懲癡頑。

151 九月十一日訪水野子隆

残陽已入雲痕遠。古梵伝鐘景更幽。今宵夢作江南客。蘋葉無情還報秋。

152 岐江晩景

江上漁家密柳東。水声声響荻蘆風。晩挂珠簾望江左。残陽影落翠連紅。

153 九月十六日豊年祭

豊年声徹一村邸。也是当年雨麦州。雨打竹窓如弾瑟。三觥占得満山秋。

154 十七日暁起望鶴城山

金天粛々鴈南来。白露為霜気爽哉。一自秋風渡岐上。江頭寒水動山開。

155 十八日遊瑞巌山

疎鐘断夢一声迢。霜満千峰紅葉饒。月落

鳥啼瑞巌暁。小寒山寺小楓橋。

156秋思憶福城旧遊

曽自羽江泛画橈。楚雲峡月恨難銷。千行欲寄佳人遠。夢到福城九十橋。

157九月十日有事于啓明学校

休謂淵明帰去辞。守安五斗也風流。江南山水多勝景。不似残陽動晩秋。

158題不識庵賦月図

赤壁休誇曹孟徳。軍営賦月亦雄哉。磊落胸襟兵十万。包羅能海越山来。

159和田士徳僧舎梅詩

風前何要悟無常。詩酒須為千酔場。唯我独尊阿閦仏。多情亦嗅瓶梅香。

160偶成

天運循環不要驚。哀鴻声裡亦関情。秋闌楓嶺一痕月。断続砧聞古鶴城。

161題梅月図

文章雖未達天真。独喜青衫不至身。可憐湖上籠煙月。亦被梅花悩半春。

162土岐学校楼上所看

挙顔嵐翠撲眉端。早雁渡江岐水寒。霞靄恵那山一角。亦為暁望比良看。

163偶作

雁来時節雨蕭々。岐水砧驚客寮。曬首秋風為底事。庭前休亦笑芭蕉。

164題秋水図

楓落呉江漁艇寒。一行鴈字水漫々。白鷗泛処秋山動。亦使夕陽蘆岸残。

165十月廿六日予西遊暁来有作

荻蘆洲外鴈成行。落月残辺飛有声。秋風吹渡千峰暁。一箇道人踏露行。

166犬山客舎

呼来一瓶忍冬酒。鱸膾且傾忘客眠。篷窓夢破蕭々雨。白帝城辺雨似煙。

167名古屋雑詩

満街遊人幾往還。錦繍綺羅山為壇。硝灯輝処明如昼。万瓦新霜映月寒。

168女紅場

女紅場浄錦綉明。今日二喬何講兵。裡有嬋妍映玻帳。一籬秋菊吐香清。

169十月廿八日将下蘇水

好是松洲天色曙。清鐘響処散離愁。欲喚渡船下蘇水。蘆花残月不堪秋。

170十一月廿三日新嘗祭、恭賦

甘露浸潤日本洲。瑞苗嘉穂望悠々。聖英天皇明徳渥。万民歌祝太平秋。

171和田徳詩

紙上雲煙起。蛟龍躍墨池。今日会佳節。千觥要作詩。

172鶴嶺暁望

暁踏翠微攀鶴嶺。浩然之気溢眉間。何物乾坤最清絶。朝暾雪映御駒山。

173 課夜学

江南雨霽雲将散。新月妍々暮色幽。欲向夜学楼上去。原泉滾々帯声流。

174 四更読史

短檠徹暁独看史。亦是当年鉄石士。松籟吹来瑞巌鐘。一輪寒月天如水。

175 喜雪十二月廿日作

昨夜彤雲起水涯。晩来作雪参差。竹坰?認得鞋痕印。応是何人尋句過。

176 冬至 廿二日作

一樹寒梅向日開。南軒喜見小陽回。祝禧東帝幸無恙。已有一番春信来。

177 除夜書懐二首

爆竹一声歳欲除。空思報国感居諸。年華猝々流如水。贏得半生属蠹魚。

無奈風塵纏此身。忽焉十又八年春。漫誇少壮勿過日。不老門前有幾人。

庚辰十三年

178 元旦恭賦二首

普天率土皆皇民。尭政陶々文物新。村酒先擎万觴祝。高歌元旦聖王春。

聖恩浩大臣何報。亦是自由自主民。赤輪輾上海天暁。照射三千余万人。

179 試筆

急驚硯海起雲霧。雲霧化龍龍欲飛。更因青州従事賜。始知筆下洩春機。

180 二日会宴席上吟

一犁膏雨消春雪。三盃清醇洗悒情。酔来漫枕琴書聴。滴々芭蕉葉上声。

181 読万国史有感

古往今来事茫々。誰以英雄目百王。君見空中一輪月。千秋万古掛如霜。

182 贈飯野子謙

君予之心友也。癸酉之歳、予北遊、君亦去行横港。不相見七年。今茲一月、聞君帰省、余不堪悦、急賦一首述懐。

旧時山水訂盟約。分袂已看律七回。柳眼将眠梅欲笑。東皇更引故人来。

183 論詩

作詩応是要精神。無気無魂全未真。君看風雪灞橋路。天籟蕭々吹月新。

184 一月四日趨教育会議、晩夕下螺山

欲報国恩起斯道。草鞋破雪下螺巘。晩鐘声裡日将没。数抹落霞化鷲飛。

185 客舎春雨

六橋煙柳旧時春。為客亦看花色新。昨夜南村雨多少。落梅庭裡亦傷人。

186 二月尽趨多治見

一泓之水繞東西。柳架橋頭路欲迷。春色濛々湿花雨。紅梅詞(ママ)畔鵤胡啼。

187 絶句

白梅居ノ北柳園ノ西。渡月橋辺碑石ニ題ス。満山ノ春色花ニ無シレ語。臥シテ聴ク黄鸝ノ呼ビテレ友ヲ啼クヲ。

188 土岐山上煙雨

満腔ノ熱血注ガシ二何レノ処ニカ一。愛国ノ心情如クレ許かくノ悠ナリ。万岳千巒みるみる看々欲スレ失セント。身ハ衡キテ二煙雨ヲ一入ル二西州ニ一。

189 訪ヒ二田君ヲ一書ス二樓壁ニ一

緑巌苔石鎖ス二山扃けいヲ一。中ニ有リ二道人一点ス二易経ニ一。竹林風起リ蕭々トレ響キ。散ジテ作ル二千峰龍嘯ノ声ト一。

190 閑居

世間ノ栄達幾循環。長ク擲チテ二功名ヲ一附ス二釣竿ニ一。簾外ノ落花人不レ管セ。唯看ル煙雨ノ繞ルヲ二溪山ヲ一。

191 烟雨

江南ノ雲樹遠ク糢糊タリ。何処ノ樓台ゾ半バ有無。天公亦学ブ米家ノ法。写シ作なス。溪山烟雨ノ図。

192 梅花

林子ノ高韻千古遠ク。西湖居畔試吟ノ鞍。風来リテ庾嶺暗香散ジ。鐘ハ入リテ二孤山ニ一鶯夢残ス万。頃ノ黄雲霞醜暖カニ。一梢ノ氷雪素魂寒シ。願ハクハ将もツテ二松鶴山頭ノ月ヲ一。長ク就キテ二梅花帳裡ニ一看シ。

193 岩邑城懐古

羆熊洞暗クシテ溪泉冷カナリ。天狗廟荒レ古塚残ス。秋草茫々人不レ見エ。断猿一叫白雲寒シ。

194 四月念五、田君見ルらレ過よギ詠ズ二案上ノ櫻花ヲ一

郊外春忙シク人似タリレ織ルニ。草堂無クレ事試ム二吟評ヲ一。芳嶺ノ淡雲墨江ノ錦。収メ来ル案上一枝ノ櫻。

195 初夏山居

槐影当リテレ窓ニ雨気催ス。維摩ノ一帙読ムコト幾回。山房昼寂トシテ無ク二人ノ訪フ一。已ニ有リ二薔薇ノ書院ニ開ク一。

196 三更読ムレ史ヲ

夜闌ニシテ天籟已ニ寥々。独リ嚼シテ二残篇ヲ一読ムコト半宵。風露満チレ庭ニ虫切々。蟾光如クレ水ノ滴ル二松梢ニ一。

197 念三訪フ二田君ヲ一得タリ二元韻ヲ一

一輪ノ玉鏡破ル二黄昏ヲ一。看尽ス白雲ノ収ムルヲ二石痕ヲ一。風ハ払ヒテ二翠陰ヲ一月揺動シ。蒼龍走ル処是レ松根。

198 五月念四、夜学樓上月色甚ダ奇ナリ

晩ニ納メテ二清涼ヲ一上ル二画樓ニ一。満天ノ風露気如シレ秋ノ。三分閑却ス楊州ノ月。情ハ在リ二江南垂柳ノ舟ニ一。

199 初夏山居三首

竹樹送リテレ涼ヲ正ニ爽然。清風吹キ払フ煎茶ノ烟。一場ノ午睡我ガ分足リ。唯有ルノミ三蟬声ノ到ル二机辺ニ一。

落日雲峰初夏天。山門有リレ客対ス二先賢ニ一。好シ乗ジテ二晩涼ニ一駆ス二酔歩ヲ一。緑槐乱シテレ影在リ二飛泉ニ一。

半年此ノ地領ス二風騒ヲ一。始メテ識ル山居亦有ルヲレ情。満庭ノ涼雨蓮池ノ晩。銀玉蕭々迸リテ散ズレ声ヲ。

200 八月帰ル二家山ニ一

暁ニ発ス白蘋ノ洲。認メ来ル水寺ノ樓。風樹遮リ二人面ヲ一。乱山掠ム二馬頭ヲ一。已ニ知ル逋客ノ韻。亦酌ム謫仙ノ流。樗材難キモレ作シレ用ヲ。何若いかんゾ此ノ清遊。

201 初秋聴クレ雨ヲ

冷雲一帯擁シ二青洲ヲ一。雨ハ趁ヒテ二新涼ヲ一注グ二梧樓ニ一。忽チ被る二疾風ニ一吹キ愁ヲ送ラ一。芭蕉窓外不レ堪ヘレ秋ニ。

202 暁ニ発ス

暁往翠洞露気濃。日華初出映危峰。一水溶々山靄々。朝風吹送梵林鐘。

203 九月念四暁起趨岐阜

松間残月滴餘光。玉露沾衣秋草香。回首千山迷暁靄。日華出処是南陽。

204 到岐阜

人世有分儘自由。彫蟲小技亦何尤。七向金華山畔発。蘋風已渡藍川秋。

205 旧重陽

茱萸底事登高去。須会文明飛羽觴。猶有陶家脱塵趣。一枝黄菊領幽香。

206 秋日絶句

晴日山窓秋気清。寒泉古鼎聴茶声。高人自有詩情在。紅葉林辺踏錦行。

207 尾境望鈴鹿山

回首秋光落満顔。稲田十里尾濃間。蒼龍蜿転向南走。此是勢州鈴鹿山。

208 暁発名古屋

数声暁鳥一痕月。車轍衝霜発陌中。金鱐（鯱）城頭回首看。曙光遠在遙岑東。

209 十一月念四発岐阜

帒々妖雲圧金嶺。亦看風濤捲曽川。此生心事人知否。欲叱蛟龍躍九天。

210 除夕有感

回頭従事不堪感。三十六旬似夢魂。微力難為斯道大。鞠躬聊以答君恩。

211 旧端午弔屈

滄浪之水。浩々蒼々。楚国忠士。葛藟身沈。義徹骨髄。寄情離騒。端午閲史。千古悲憂。菖蒲饗鬼。其神凄々。

辛巳十四年

212 元旦

靄々曙光映艸堂。瓶梅破蕾素魂香。可歓慈母先可恙。且向雛長献寿觴。

213 貽市岡太二郎子期其成業

喜君十歳已能文。頭角嶄然志不群。宛似梅花雪中発。莫教風伯散芳芬。

214 早春漫興

新陽雨霽暖初加。野水橋南詩人家。吟杖尋春出蓬戸。東風猶未到梅花。

215 偶成

疎懶且知斯道大。執鞭依然旧時容。坦翁有句君須記。文酒本来是俗風。

216 三月旬五与千葉子帰岩村

寒林霜葉飛紛乱。行々看鴉群呼友帰。日暮経過曲山路。凍風捲雪撲征衣。

217 東海詩行并引

予曽耽詩文彫琢吟哦日以為事而見聞之広、稍々悟其空事爾後非閑散之場亦不企也矣。今茲三四月之交有事于東京、取路東海道往復浹旬、毎逢景光之勝偶然発

于懐者、今録以楮毫集得数首亦言志耳。
豈可謂詩焉乎。

開進今時争着鞭。人生須要占機先。蛟龍遂不池中物。風雨飛揚東海天。　途上吟

三百年前戦地秋。想看腥血注原頭。下車欲弔幽魂寂。潤水潺湲呑恨流　桶狭間謁今川義元墓

望岳亭高臨海瀾。風光争秋玉欄干。松連田浦浦頭路。船入保洲洲外灘。函嶺靄雲遮眼遠。富山白雪照顔寒。倩来揚董名家手。縮画生絹日日看。倉沢望岳亭

千株松影動蒼波。十里沙洲風色多。仰見芙蓉峰上雪。馬頭初信赤人歌。過田子之浦有感

函山風色望何突。画趣看驚造化工。一碧水光明似鏡。清波倒影玉芙蓉。　筥根蘆湖

重入京城尋旧遊。某山某水思悠々。閑窓想起十年事。和雨一宵到枕頭。京城客舎吟

城外春光猶未帰。遠人欲去製征依。客窓昨夜梅花雨。夢向天神祠畔飛。将発京、賦遺

草鞋曽冒函山嶮。今日滄溟自在還。風激怒濤海天暗。輪船飛渡遠州灘。船航遠洋

218梅霖偶霽即事
幽篁戢々擁衡門。梅溽新収緑草痕。終日対研校讐了。徐廻苔砌歩叢園。

219偶成
高楼眠覚俗紛空。三椀芳茶幽趣濃。伸紙快然磨硯海。筆風陣々走雲龍。

多歳屏居岐水潯。瀟湘風物絶塵音。一竿時結渭濱夢。隴上空為梁甫吟。身処江湖思君功。心存台閣愛民深。愧吾魯鈍乏経略。磨淬胆肝尽大任。

220詠雨
ココニ左ノ詩ノ原作ガ五行アリ、所々添削シテイルガ完成シナカッタ。モチロン左ノ詩ト共通ノ語句ガ多イ。韻ハココノモノガ上平四支韻、後ノモノハ下平八庚韻。コノ上、欄外ニハ非ト書キ、左ノ詩ノ上ニハ是トシテアル。(田子注)
滃浡玄雲低醸雨。細如絲散大盆傾。霖潦諷主示陰譴。一瀉援正破獣兵。不遇曽嘗囚裡苦。旱天屢受聖王誠。最宜秋杪蕭條夕。修竹楼頭滴葉声。

221雷雨
一陣疾風吹雨来。忽驚掣電迸奔雷。乾坤頓変清浄界。不識人間有熱挨。

222納涼
夏山清景最堪描。況亦水亭泛釣撓。好是暁来雨過後。葛衫趁冷渡湖橋。

223謝水埜子餽西瓜
壮士提来大禿顱。抜刀一斬迸紅朱。呵々笑喫清涼味。甘水淋漓沾口鬚。

224加藤肥州
一言雄弁破夷胆。七寸短刀保託孤。異日肥州猶在世。徳翁覇業有成無。

225大猷公

袮裀将軍。袮裀已ニ握ル将軍ノ権。汝欲セバレ反セント則チ反セ
任ス二汝ガ便一ニ。自今給フレ暇ヲ当三年。諸侯恐レ諸
侯恐懼、無シ二敢ヘテ言一フ。一意奉ジテレ命ヲ甘ンズ二列藩一ニ。嗚
呼将軍。胆大呑ム二四海一ヲ。一語凛々タリ三百載。

226帰園ノ作
宿痾来リ養フ故園ノ庵。泉石声中覚ユ二躰ノ軽一キヲ。
九畹紫蘭思フ二楚客一ヲ。一籬ノ黄菊慕フ二淵明一ヲ。竹ハ
従リ二風外一音加ハリテ爽ナリ。月在リ両余光愈清シ。最モ好シ読
書心事会ス。芳樽一斗瀝グ二愁城一ニ。

227新雪記スレ喜ヲ
夜来凛々不レ成サレ眠ヲ。暁起堪フレ歓ブニ新雪翩ル。何ゾ羨マン香
爐撥ゲテレ簾ヲ看ルヲ。銀松玉竹在リ二窓前一ニ。

228蘇秦
前ハ則チ倨驕後ハ則チ恭。富貴異ニスルモ礼ヲ皆相同ジ。誰カ知ラン
究困蒙ルレ嗤ヲ者。至リ起ス洛陽輜重ノ風。

229十二月念九、辞シテレ職ヲ帰ルレ郷ニ。賦シテ遺ス二諸生一ニ。
慇懃謝ス二諸郎一ニ。世路唯羊腸。欲セバレ就カント二心身ノ業一ニ。須ラクレ
知ル在リト二勉強一ニ。

230述懐
執リテレ鞭ヲ勲懇課ス二村童一ニ。屈スレバレ指ヲ千旬一夢ノ中。休メヨレ言フヲ碌々
等閑ニ過ギシヲ。猶有リ三編著ノ遺ス二稗蒙一ニ。

壬午十五年

231元旦
暦上又看ル陽律ノ移ルヲ。疎々タリ筆硯ノ冷生涯。仁風
愛日南軒暖カニ。猶有リ三聖恩ノ到ル二茅茨一ニ。

232一月十日出デレ家ヲ遊ス二学ヲ于東京一ニ。途上吟
霜風吹キテレ雪ヲ寒シ。経過ス幾山々。欲スレ遂ゲント青雲ノ志。
一心誓ヒテ不レ還ラ。

233勢州泗水客舎待ツ二発船一ヲ
淹滞浹旬日似タリレ年ニ。前程無シレ奈ントモスル属ス二茫然タルニ一。
半宵夢破レテ孤燈寂タリ。唯聴ク涛声ノ到ルヲ二枕辺一ニ

234高島氏見ルらレ贈ラ二牽牛花一ヲ賦シテレ之謝ス二首
京城密々奈センレ塵埃ヲ。忽チ喜ブ盆山籠メテレ緑ヲ来ルヲ。日夕
樓頭誦了ル後。慇懃ニ灌漑シテ促ス二花ノ開一クヲ。
高賜ノ一株鬱トシテ作スレ陰ヲ。況ンヤ又清影払フヤ二塵襟一ヲ。休メヨレ
言フヲ盆卉無シト二幽趣一。城裏ノ寸花ハ是レ寸金。

癸未十六年

235元旦
小池風暖カニシテ凍堪ヘレ融スルニ。梅ハ帯ビテ二臘光一ヲ蕾々紅ナリ。孤客
亦逢フ履ムレ新ヲ節。酔ヒ来リテ閑ニ歩ム鳳城ノ東。

甲申十七年

236聴キテ二鐘声一ヲ有リレ感
日斜メ黄葉山前ノ路。月落チ楓橋夜泊ノ時。底なに事ゾ同声
幾様ノ響。晩鐘ハ寂々暁鐘ハ奇。

237箱根山中ノ作
一山経過スレバ一山来ル。一水ハ流レ行キ一水ハ回ル。無限ノ水山無限ノ
趣。何ゾ妨ゲン石径ほしいままニ侭ニ崔嵬タルヲ。

238贈ル二湯本金泉楼主人一ニ
函嶺ノ東辺百尺ノ楼。有リテレ縁今日是ニ来リ遊ブ。三

更浴罷静人蘋。聴断渓泉嚙石流。

乙酉十八年

239 元旦

為客京城亦迎年。此生須喜日新天。何図濃嶺餐霞侶。誦得蟹行書数篇。

240 日光山詣徳川氏廟有感

維十八年第七月。一蓑曳杖登晃山。瞥見金殿煌々色。映出松杉万翠間。朱門彤壁幾処通。金閣曲堂西又東。白玉装成姑射雪。棟梁彩出五雲中。画龍留得名手筆。彫猫猶存古人工。（日暮門頂壁有狩野之信画龍。奥社門棟有左甚五郎彫猫。）山節藻梲何足佐。瑤台九重古今同。君不見楚人一炬秦宮燃。人工安得遺永年。青山到処可埋骨。不用玉堂故鮮妍。底事将軍尊大甚。絞取六十六州銭。金殿雖美奈破壊。玉堂畢竟免閴然。盍以此財盛学校。養成名士文教伝。吾登晃山観景物。草木欣々鳥翩々。悟得万象生々理。亦知生物幾変遷。金殿到底驕奢事。驚戒後人在日前。

241 明治十八年十月旬日、与同窓諸子従松村先生採集植物於高尾山、小仏峠。蓋二山当武甲之境峰巒重畳、頗富幽勝、珍草奇木亦多在焉。

来尋武甲二州間。鳥道綿々接半天。飛瀑有声懸絶岸。白雲無影圧山巓。此行何処採仙薬。今日亦庸試緒鞭。正是千峰秋色好。丹楓紅葉不勝鮮。

丙戌十九年

242 四月一日発京城遊豆之熱海。作雑詩数首

欲賞勝光払欝情。開春今日試南行。京城諠閙杳然去。閑自緑陰聴鳥声。菜黄麦緑野光鮮。春靄朦朧欲睡天。欲賦新詩序佳景。電車飛過六郷川。昨入函山宿石樓。三更夢覚聴啾々。起開窓戸知非雨。渓水潺湲砕月流。一帯青巒擁海門。青湾尽処有漁村。風光冷眼虚心看。勿倣三騒人喚酒樽。漁村断続接青湾。幽趣添為幾般山。日夕風収洋面穏。松巒影在碧波間。（次井上円了君熱海詩韻）一枝健筆叱風雲。南海勝光独属君。他日再遊邂逅夕。樓頭剔燭亦論文。（井上君見示一詩。由次其韻）

243 六月卅日市岡子峻帰省。賦一詩送其行。

時予亦将遊東方。

我入羽州君向濃。□□分手暁天鐘。月岑残雪岐江水。帰来慇懃話安蹤。

244 七月従大学教授矢田部先生採集植物于佐渡。事畢将帰航。而汽船不到数日、衆不堪無聊。已而至。賦以記喜

留遊海島経幾日。佇?立亭欄望水限。忽有黒烟天際起。喜看汽船駆波来。

245 留遊北越出湯洞春館
風光堪愛洞中天。況亦翠蘿□眼前。最是人
間閑楽事。石亭枕肱聴鳴泉。
246 八月十一日登信州駒嶽
駒嶽採奇草。層々攀翠微。脚下白雲
起。掠人衣袂飛。
247 八月至美濃土岐、逢田子顕。子顕予旧交也。賦
贈
東奔西駆事紛々。果識是生如水雲。
猶有旧盟未全変。鶴城山下複逢君。

廿年丁亥
248 伊豆山客中新年作
樓頭暁起迎初日。松影参差浪影鮮。
無事無塵心自逸。有山有水景尤妍。
浴湯身是客中客。採薬境真天外天。
愛此海南風候暖。一汀草色入新年。
249 七月中旬随教授矢田部良吉君、採草於羽前羽後。
途上有詩。録一二
欲探羽州第一奇。斯行何処豈無詩。朝陽初出
露華湛。身掠千青万緑飛。汽車中所看
自是壷中小天地。衆峰如屏□区寰。隅川橋上
駐車望。一掬青螺看信山 福島雑詩
250 登羽後鳥海山歌
鳥海山高七千尺。秀抜笏立羽海濱。北洋渺々
無物障。南方唯見有月岑。両山対時如特角。
恰是漢楚争覇心。自餘群巒如蟻垤。欲比
張陳一方臨。歳次丁亥七月間。我降月岑
登此山。佐巌深処多奇草。雲端攀躋
雪路寒。聞説享和第一年。山巓噴火
飛硝煙。 岳骨千仞看欲墮。登攀何人不悚
然。山隈陰気蒸醸雨。凝為殷雷轟嶽巓。
須臾山風吹雲散。遝箇新月在半天。

廿一年戊子
251 寄和田懋卿
高邁羨君耽翰墨。胸襟磊落絶塵埃。
東台春花□千朶 品海秋闌月一輪。
風物触情添雅趣。百篇従筆領天真。
交遊堪喜於吾厚。共是同州同学人。
・第三句不安定
252 寄和田鶴荘併似社友
結盧修竹塢。花木亦怡顔。玉碗意思
湧。読書心自閑。友情深似水。世事
嶮如山。擬我二三子。与誰処比問。

以上が「竹雨樓詩集一」の全内容である。明治七年から二一年までの三好の境遇については前述したので、詩が作られた折々の彼を知る手懸りになるのではないかと思う。